

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



大阪松竹座は、1923(大正12)年に関西で初の洋式劇場として産声を上げました。

あれは僕が小学生に入る前から60年近くも前のことでしょうか。父親に連れられて、初めてその建物を見たときは、「西欧のお城みたいやなあ」と感動したのを覚えています。その後、94(平成6)年までは、洋画封切館として人々から愛され、97(平成9)年には、その外観を残しつつ実演の劇場として生まれ変わりました。

この場所を拠点に、上方歌舞伎を支え続けた歌舞伎俳優の片岡秀太郎さんが、5月23日に大阪府吹田市のご自宅で亡くなりました。享年79。死因は慢性閉塞性肺疾患(以下、COPDと表記)との発表です。

COPDは従来、慢性気管支炎や肺気腫と呼ばれてきた病気で、全国で約700万人もの患者

208 歌舞伎俳優 片岡秀太郎



最期まで自宅で療養

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

さんがいると推計されています。しかし、その大半が未診断、未治療という状態です。大気中から体内に酸素を取り入れる肺胞が破壊されると、血液中の酸素濃度が低下し二酸化炭素濃度は上昇します。COPDが進行すると、咳や痰が続き、歩行や階段の昇降時の日常動作でも息切れを自覚します。周囲も「せいせい」という喘鳴に気が付きます。「年のせいだろう」と考える人が多いのですが、心あたりのある人はぜひ一度、肺のCTや肺機能検査を受けてください。COPDの人がコロナに感染した時は重症化する可能性があります。「基礎疾患がない」と言われている人の中にも実は隠れCOPDの人が多くいることを日々の診療で実感しています。

また、COPDの人は一般在宅で看取るのが難しい、と思われています。この病態は終末期の見極めが難しいからです。急変時の対応スキルが貧弱な在宅医が診た場合、「ウチでは診られません」と救急車を要請するケースも少なくありません。

しかし、在宅酸素療法や在宅緩和ケアに熟練した医師であれば、住み慣れた自宅で最期まで過ごすことが十分可能です。片岡さんも、きっと相性が良い在宅医との出会いがあったので、最期まで穏やかに自宅で過ごすことができたかと推測します。

片岡さんは、2019年に人間国宝に認定されました。上方歌舞伎を衰退させまいと、次世代の育成にも力を注がれました。

このコロナ禍で、伝統芸能の世界も大変な損失を被っていることでしょう。芸術は、不要不急ではありません。片岡さんも出演予定だったという大阪松竹座の「七月大歌舞伎」。関西人のひとりとしてご盛会をお祈りしています。負けるな! 関西。

良い在宅医との出会いで穏やかに